

「深く考える」授業の創造

(3年計画の1年目)

研究主任 高杉 廣張

1 研究主題設定の理由

(1) 生徒の実態

本校生徒は学習に対しての意識が高く、知識が豊富であり、基礎的な技能も習得されていると思われる。また、いくつもある知識や技能の中から必要なものを選び出すことには長けている。しかし、自分の考えを述べたり、思っていることをまとめて表現したりすることは苦手である。

意見を述べることを例としていうと、知識が豊富になり、習得された技能が多くなることに比例して、自分の意見をはっきりと述べられるわけではない。知識や技能を増やすことは大切だが、生徒にはそれで満足してほしくはない。既習の知識をならべただけでは、自分の意見を十分に伝えることはできず、知識や技能を活用して、伝えようとする内容を吟味する必要がある。そのことを生徒自身に認識させていく必要があるだろう。

(2) これまでの研究との関連

本校ではこれまで各教科研究を中心に据えてきた。ここ10年間の研究を振り返ると、平成17年度から19年度までの研究では、「かかわり」をキーワードに、教材と日常事象とのかかわり、教材の持つ学問の体系的なかかわり、教科独自のアイデア同士のかかわりの3点に焦点をあて、学習内容が頭の中で整理、構造化されて活用できるものとなることをねらった。

平成20年度から22年度の研究では、互いに関連づけられてきた知識や概念を社会に「発信」することにより、さらに深化させることを目指した。そのために、自分がもっている知識や概念をもう一度見つめ直し、相手や状況によって「再構成」することを研究してきた。

平成23年度からの3年間は「自ら問う力を育む」を主題に掲げ、生徒自らが「問い」をもつことを切り口とした。考えるべき視点や方向性のもととなる「問い」を、生徒自らがもつことができれば、自分で課題を解決できる力を生徒が身につけられ、「問い」が生徒の思考力・判断力・表現力等を育むきっかけを生み出すものとなると提案した。

平成20年度からの研究では現行の学習指導要領で示されている3つの要素、すなわち、「基礎的・基本的な知識及び技能の習得」、「それらを活用した思考力・判断力・表現力等の育成」、「学習に取り組む意欲」をバランスよく育むことを目指してきた。とくに「思考力・判断力・表現力等の育成」の面に光をあてており、その点で、本研究は流れを汲むものである。

(3) 現代的課題の解決

われわれを取り巻く社会は日々変化している。例えば、インターネットの普及等により多くの交流が生まれ、自分の意見や考えなどを相手に伝える場面が増えてきたように思う。相手に伝えるということは、その内容を吟味していく必要があるが、インターネット等を使えば、他人の言葉の切り貼りで、「自分の意見」を生み出すこともできてしまう現状がある。本校生徒の実態とも関連するが、情報(知識)を並べ、体裁を整えただけでは、十分に表現されたとは言い難い。また、知識の量を増やしただけでは、十分に理解できたとも言えないだろう。それらは吟味されることによって、より価値のあるものになるはずである。

(4) 教育界の要請

文部科学省は、教育課程の改善の検討を行う際の基礎的な資料を得ることを目的に、「育成すべき資質・能力をふまえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会」を設置した。そして、「児童生徒に育成すべき資質・能力」という点から、現在の学習指導要領の構造を見直すことを議論し、提言をおこなっている。

一方、国立教育政策研究所においては、プロジェクト研究「教育課程の編成に関する基礎的研究」において、資質・能力を育成するモデルとして「21世紀型能力」などを提案し、教育課程の基準の見直しの審議に向けて報告書をまとめている。文部科学省は、今後、国立教育政策研究所の研究などと連携しつつ、検討を進めていくとしている。本研究は、学習指導要領に示される内容と大きく関わっており、今後の動向に注目したい。

学校教育法第30条第2項には、「生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない」と定められている。そして、そこには学力における重要な3つの要素が示されている。

本研究は、生徒に基礎的な知識及び技能の習得だけではなく、それらを活用した思考力・判断力・表現力等の育成を目指している。また、生徒が主体的に学習に取り組む際には、論理的思考力、批判的思考力、メタ認知能力などの資質・能力が必要となるであろう。「『深く考える』授業」は、これらを育成するために有効であると考え、本研究の主題として設定した。

2. 「深く考える」授業について

授業において何らかの課題に直面したとき、生徒はその課題に向き合って試行錯誤する。そうして自分なりに導き出した答えや、自分の思いや考えを伝えようとして工夫した表現に満足せず、それらをより高次なものにしていこうと吟味し検証していくことを、本研究では「深く考える」とする。

自分で十分だと感じたとしても、改めて自分で見直してみたり、他者から見てもらったりすれば、改善の余地が残されている場合がある。自分なりに導き出した答えや、工夫した表現は、個々の既存の知識や見方、考え方などに基づいてまとめた一応のものである。それにもかかわらず、授業においては、多くの生徒がそれらに満足してしまい、よりよいものを目指して吟味し検証するということをしない傾向がある。

心理学において、元来、人は不完全さや不十分さを自覚したとき、それを明確にしたい、埋め合わせたいという欲求をもつといわれている。ゆえに、自分なりに導き出した答えや、工夫した表現の不完全さや不十分さを生徒に自覚させることができれば、もう一度吟味し検証してみようとする姿勢をもたせることにつながっていくはずである。生徒が自分自身でそのようなことを自覚できるようにするためには、『自分自身を俯瞰する』ことが必要であると考え。他者と交流し、自分とは異なる見方、考え方にふれることは、その一つの例であろう。本研究では、『自分自身を俯瞰する』ことを授業に取り入れ、経験を積ませていきたい。そして、それが生徒に学び続ける態度を育むことにつながっていくと考える。

◇『自分自身を俯瞰する』こと

広辞苑（第六版）には「俯瞰」とは、「高い所から見おろすこと。全体を上から見ること。鳥瞰。」と書かれている。全体像をとらえることで、見えないものが見えるようになるという経験は多くの人が持っているのではないだろうか。例えばサッカーの試合中、プレーヤーやベンチから見て監督、選手よりも、スタンドから観戦している人たちが、パスを出すスペースや、シュートのタイミングなどがわかったりするものである。プレーヤーにとっては最善のプレーでも、全体を見ている人にとってはそうではなかったりするの、見えているものとそこから判断できるものが異なるからである。プレーヤーが観戦者の視点をもつことができたならば、おそらく、よりよいパフォーマンスを発揮することができるはずである。

本校でいう『自分自身を俯瞰する』とは、上記のように他者の視点を取り入れるなどして、自分自身を見つめてみることをいう。かならずしも上から見て全体をとらえることだけを指すものではない。全体で広く見ていたときには見えていなかったものが、一部に焦点をあてることで見えるようになることがある。これも、『自分自身を俯瞰する』ことの例である。また、自分の立場からすれば正義であったものが、立場を変えて考えてみると、とたんに疑わしく感じられたり、ある視点から考えて対象のすべてをわかっていたつもりが、視点を変えてみると、わかっていなかったことに気づかされたりすることもあるだろう。

学習においても『自分自身を俯瞰する』ことは有効にはたらくと考える。そこから気が付いたことを活かすことで、生徒は一応の答えや表現を修正、改善することができるだろう。自分の導き出した答えや工夫して表現したことを吟味し検証してより高次なものに変えていく、つまり「深く考える」ためには、『自分自身を俯瞰する』ことが重要な要素だと考える。

たとえ自分の出した答えや表現したことが不十分であったとしても、それを修正していくには、生徒がそうする必然性や必要性を感じていなければならない。また、生徒の「より良いものにしていこう」という気持ちがなくては、自分なりの答えや表現に満足してしまっている状態にゆさぶりをかけたり、一度作りあげてきたものを崩したりしていくことは難しい。私たち教師は授業において、主体的に活動に参加しようとする生徒の気持ちを高められるよう、課題の提示などにおいて工夫をしている。それと同じように、生徒が学習において一応のゴールに到達した段階で満足せず、よりよいゴールを目指して学習を続けていこうとする気持ち、つまり「深く考え」ようとする気持ちをもてるように工夫する必要もあるだろう。

3. 研究の目的

何のために「深く考える」授業を展開するのか。それは、自分の答えや表現、理解の状況を、他者や社会との関係の中で捉え、比較したり、視野を広げたり、視点を変えてみたりして吟味する機会を与えることにある。そうすることにより、次のようなことができると考える。

- 自分の答えや表現、理解の状況をより高次なものにしていくことができる。また、そのために必要な資質・能力を養うことができる。
- 知識や技能を活用することが求められ、思考力・判断力・表現力等を育成することができる。

○主体的に粘り強く学習に取り組み、自ら学習を求める態度を育成し、学習意欲を高めることができる。
 そのほかにも、多様な考えや価値観があることを知り、それらを認めようとする姿勢を養うことや、相手に伝えることを意識して表現することなどが期待できる。

4. 研究の内容

本研究は3年計画で進めていく。本年度は「深く考える」授業について共通認識を図りながら、各教科で授業実践（提案）し、意見交換しながら、研究を具体的にしていく。まずは『自分自身を俯瞰する』場面を学習過程に取り入れることを中心に進め、何のために、どのような場面で、どのような方法で『自分自身を俯瞰する』ことを取り入れるのかを教科として検討していく。

『自分自身を俯瞰する』ための資質・能力としては、メタ認知能力、論理的思考力、批判的思考力などがそれに当たると思われるが、今年度はいずれかに絞って研究するものではない。『自分自身を俯瞰』している姿、「深く考える」姿はどのように現れるのか、また、「『深く考える』授業」の効果を教科ごとに検証していく。

5. 研究の経過

第1回 校内研	4月 3日 (木)	研究の方向性検討, 事前研・公開研日程の確認
第1回 教科研	4月 3日 (木)	今年度の研究の方向性検討, 授業者確定
第2回 教科研	4月 30日 (水)	教科研究の方向性検討
第2回 校内研	5月 12日 (月)	今年度の研究主題について
第1回共同研究会 基準日	5月 28日 (月)	教科研究の方向性, 指導案等の検討
第3回 校内研	6月 4日 (水)	授業研究会 (研究主任による授業提案), 研究主題検討
第3回 教科研	6月 23日 (月)	研究主題検討, 第1回事前研究会準備
第1回 事前研	7月 4日 (金)	研究授業 9教科9本の授業を提案
職員会議内①	7月 9日 (水)	第1回事前研究会の総括
第4回 校内研	7月 22日 (火)	夏季校内研①
第4回 教科研		
第2回共同研究会 期間	7月 23日 (水) ~8月17日 (日)	教科総論, 指導案等の検討
第5回 校内研	8月 18日 (月)	夏季校内研②
第6回 校内研	8月 19日 (火)	夏季校内研③
第2回 事前研	8月 22日 (金)	公開研究会指導案の提案
第5回 教科研	9月 2日 (火)	公開研究会に向けて教科総論, 指導案等の検討
職員会議内②	9月 24日 (水)	第2回事前研総括, 公開研究会準備
第3回共同研究会 基準日	9月 26日 (金)	公開研究会にむけて教科総論, 指導案等の検討
第7回 校内研	10月 15日 (水)	公開研究会の準備, 最終確認
中等教育研究会	10月 18日 (土)	公開研究会 9教科12本の授業を提案
職員会議内③	10月 24日 (金)	公開研究会の総括
第8回 教内研	10月 31日 (金)	公開研究会の総括
第6回 教科研		
職員会議内④	11月 21日 (金)	研究紀要について
第7回 教科研	11月 28日 (金)	教科研究のまとめ
第9回 校内研	1月 21日 (水)	研究紀要について
第10回 校内研	2月 6日 (金)	全体研究のまとめ, 来年度の研究展望
第11回 校内研	2月 13日 (金)	全体研究のまとめ, 来年度の研究展望
第12回 校内研	3月 2日 (月)	来年度の研究展望

◆第1回事前研究会

- ① 日時 7月4日(金) 13:30-16:30
 ② 流れ 全体会 13:30-14:00
 研究授業 14:10-15:00
 各教科分科会 15:10-16:30
 ③ 内容 ・本年度の全体研究と各教科研究の方向性について総論，研究授業で提案する。
 ・提案内容について協議をおこない，検討する。
 ④ 授業者及び会場

教科	教科主任	授業者	クラス	会場	分科会会場
国語科	富高 勇樹	富高 勇樹	2-4	図書室	図書室
社会科	田邊 靖博	佐野 愛	3-4	3-4教室	3-4教室
数学科	井上 透	井上 透	1-1	1-1教室	1-1教室
理科	宮澤 和孝	萩原 修	3-3	第2理科室	第1理科室
音楽科	小林 美佳	小林 美佳	3-2	第1音楽室	第1音楽室
美術科	小俣 直喜	小俣 直喜	3-1	美術室	美術室
保健体育科	野沢 克美	秋山 知洋	2-1	グラウンド	2-1教室
技術科	山主 公彦	山主 公彦	2-3	第1コンピュータ室	第1コンピュータ室
家庭科		河野美由紀	1-4	家庭科室	家庭科室
英語科	大矢 裕子	野沢喜満子	2-2	2-2教室	2-2教室

◆第2回事前研究会

- ① 日時 8月22日(金) 9:00-11:30
 ② 流れ 各教科分科会 9:00-11:30
 ③ 内容 ・第1回事前研究会での協議をうけて修正，改善した教科総論を提案する。
 ・公開研究会における指導案について協議をおこない，検討する。

◆中等教育研究会(公開研究会)

- ① 日時 10月18日(土) 9:00-15:40
 ② 流れ 全体研究会 9:00-9:45
 公開授業Ⅰ 10:00-10:50
 分科会Ⅰ 11:10-12:40
 公開授業Ⅱ 11:10-12:00
 分科会Ⅱ 13:00-15:40

8:30	9:00	9:45	10:00	10:50	11:10	12:40	13:40
受付	全体会	移動	公開授業Ⅰ	移動	分科会Ⅰ		昼食
					公開授業Ⅱ	昼食・休憩	分科会Ⅱ
			10:50	11:10	12:00	13:00	15:40

③ 授業者及び会場

○パターンA：公開授業Ⅰ→分科会

教科	公開授業Ⅰ (10:00-10:50)			公開授業Ⅱ (11:10-12:00)			分科会 (11:10-12:40)
	授業者	クラス	場所				会場
社会科	田邊靖博	2-3	2-3教室				2-4教室
理科	宮澤和孝	1-1	第1理科室				第1理科室
音楽科	小林美佳	3-2	第1音楽室				第1音楽室
美術科	小俣直喜	3-4	美術室				美術室
技術科	山主公彦	2-4	1コン				1コン
家庭科	河野美由紀	1-3	家庭科室				家庭科室

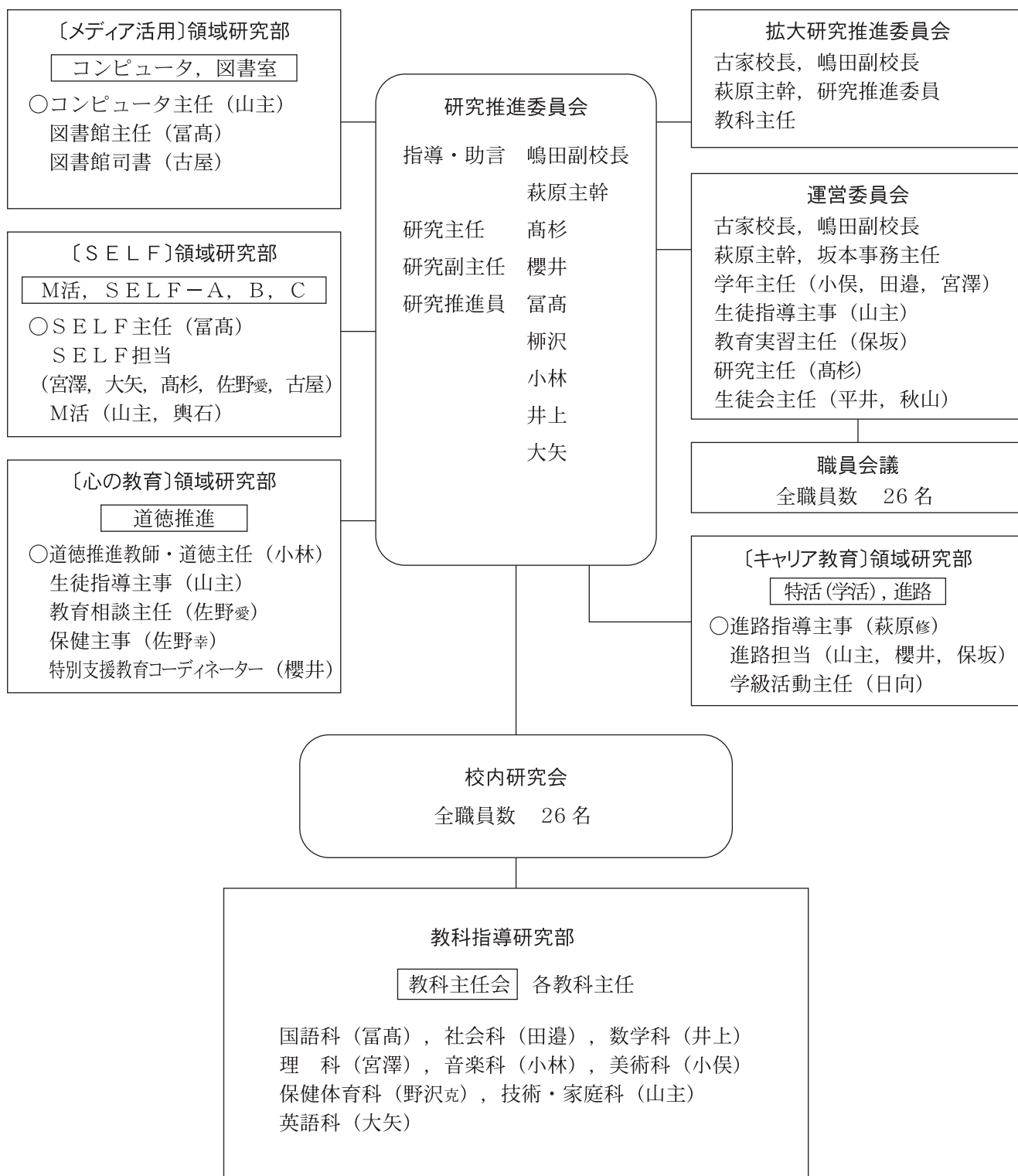
○パターンB：(公開授業Ⅰ→) 公開授業Ⅱ→分科会

教科	公開授業Ⅰ (10:00-10:50)			公開授業Ⅱ (11:10-12:00)			分科会 (13:00-15:40)
	授業者	クラス	会場	授業者	クラス	場所	会場
国語科	保坂久信	1-4	1-4教室	平井規夫	3-3	図書室	図書室
数学科	日向昭子	2-2	2-2教室	櫻井順矢	3-1	3-1教室	3-1教室
保健体育科				秋山知洋	2-1	体育館	2-1教室
英語科				大矢裕子	1-2	1-2教室	1-2教室

《参考・引用文献》

- (1) 秋田喜代美(2012),『学びの心理学 授業をデザインする』, 左右社
- (2) アルヴェルト・オリヴェリオ著, 川本英明訳(2005),『メタ認知的アプローチによる学ぶ技術』, 創元社
- (3) 今井むつみ・野島久雄・岡田浩之(2012),『新・人が学ぶということ 認知学習論からの視点』, 北樹出版
- (4) 国立教育政策研究所(2014),『教育課程の編成に関する基礎的研究 報告書7』
- (5) 高垣マユミ,『授業デザインの最前線 理論と実践をつなぐ知のコラボレーション』, 北大路書房
- (6) 文部科学省(2008),『中学校学指導要領』
- (7) 文部科学省(2014),『育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会—論点整理—』
- (8) 山梨大学教育人間科学部附属中学校研究紀要(2008~2013)

6. 校内研究組織



7. 研究のまとめ

本年度は3年計画の研究の初年度である。これまでの研究の流れや教育界からの要請、生徒の実態等をふまえ、研究主題を『深く考える』授業の創造とした。本研究は、昨年度までの研究と同様に、「思考力、判断力、表現力等の育成」を目指している。そして、「深く考える」授業は、生徒に課題を解決できたという満足感だけではなく、自分自身の思考の深まりをも実感させられるものだと考える。

私たちは『自分自身を俯瞰する』という活動を切り口として「深く考える」授業に迫ろうとしている。そのためには、理論を後ろ盾としながらも、各教科での具体的な授業提案にもとづいて議論を深めていくことこそが重要であると考えた。第1回の事前研究会では9教科9本の授業を、10月開催の中等教育研究会では9教科12本の「深く考える」授業を提案し、研究協議会において意見交換を行った。本校は、山梨大学の先生方に共同研究者として研究に携わっていただき、山梨県教育委員会、山梨県総合教育センターの先生方には指導助言をお願いしている。また、県内の多くの先生方に研究協力員としてご協力いただいている。公開授業後の研究協議会でさまざまなご示唆をいただいたことにより、全体研究、教科研究における私たちの課題を知ることができ、「深く考える」授業とはどのような授業なのか、「考える」授業と「深く考える」授業の違いは何なのかなど、私たちがさらに検討し、共通理解を図るべきことがらを明らかにすることができた。

各教科で提案する「深く考える」授業を分析、検討するためには共通の視点が必要であった。そこで本研究では『自分自身を俯瞰する』という活動を授業に取り入れることとした。私たちは『自分自身を俯瞰する』ことが「深く考える」授業づくりにおいて有効だと考えるが、本年度はその効果の検証にまで議論が及ばなかった。来年度はより具体的な視点をもって研究していく必要がある。

中等教育研究会後は校内研究会において、「深く考える」授業と、『自分自身を俯瞰する』という活動について検討を重ねてきた。共通理解を図ることはできつつあるが、依然として検討すべき課題も残っている。例えば、『自分自身を俯瞰する』と聞くと、鳥瞰図的に高い所からものごと全体の像をとらえることだと考えるであろう。しかし、本研究のいう『自分自身を俯瞰する』活動では、虫瞰図的にもごとをとらえようとすることもあり、言葉のもつ意味と実際にはずれがある。それらを修正するとともに、『自分自身を俯瞰する』という言葉の定義をより明確にしていかなければならない。また、授業に『自分自身を俯瞰する』活動をただ入れるだけではなく、その活動をより効果的にするための工夫についても研究を深めなければならないであろう。

8. 来年度の研究について

来年度も『自分自身を俯瞰する』活動を切り口として研究を進めていく。『自分自身を俯瞰する』活動は、「深く考える」授業づくりのために欠かせないものであると考える。

各教科研究で得られた成果や課題を全体で共有し、全体研究を深めていくためには、より具体的な視点をもって検討する必要がある。そこで、来年度は以下の2点についてより多くの授業実践を重ねていきたい。

(1) 課題の工夫

『自分自身を俯瞰する』活動が効果的に働き、生徒が「深く考える」ようになるためには、「どのような課題を準備するのか」が非常に重要となる。例えば、他者との交流を『自分自身を俯瞰する』ための活動として授業に取り入れ、自分の考えを他者のものと比較するような場合には、生徒に多様な考えが生まれるような課題を設定する必要がある。教師は「生徒が課題をどのように解釈し、その生徒なりにどのような答えや表現などを思い描くのか」「『自分自身を俯瞰する』活動の後に、それらはどのように変容していくのか」などについて想定し、熟慮した上で課題を設定しなければならないであろう。『自分自身を俯瞰する』活動は「深く考える」ためのきっかけとなりうるものであり、それ自体が終着点ではない。私たちは『自分自身を俯瞰する』活動のあとに何をさせるのか」についても熟慮する必要がある。

そのほか、授業のねらいを明らかにしておくことは言うまでもないが、どのような課題を設定するのかわけではなく、どのように課題を提示するのか、いつ課題を提示するのかなどについても検討したいところである。

(2) アウトプットの工夫

生徒がどのように課題を解釈したのか、また、その生徒なりにどのような答えや表現などを思い描いたのかは、書く、話すなどさせて、何らかの形として出させなければわからない。そうして初めて『自分自身を俯瞰する』ことができるからである。『自分自身を俯瞰する』にあたっては、形にしたものが、思い描いたもののできる限り反映したものであることが望ましいだろう。そのために思い描いたものと形にしたもの間に大きなずれが生じないように、アウトプットの工夫が求められる。

生徒は『自分自身を俯瞰する』前の段階で自分が思い描いたものを形にする。そうして形にしたものは、生徒にとっておそらく満足できるものであろう。しかし、「深く考える」授業では『自分自身を俯瞰する』活動により、思い描いたものを変化させ、満足している状況を崩し、形にしなおすことが求められる。「深く考える」ことができたかどうかは、『自分自身を俯瞰する』前後にアウトプットし、形にしたものによって判断できると考える。その点で、どのようにアウトプットさせるのか、やはり工夫が必要であろう。

アウトプットを工夫することは、私たちが課題の妥当性を判断する材料ともなるであろう。そして、最終的には生徒が「深く考える」ことができたのかを見とることになり、研究のまとめにもつながっていくと考える。